平塚を起点とする電車事業（１）　　（２０２０．１２）

金目川電気軌道敷設事業

平塚市の「金田地区歴史再発見事業」を受託し、資料集めに奔走しました。金田地区に生まれ育ち、この土地で暮らし続けた先輩の方々の貴重な体験談から地域の歴史を記録する。また、平塚市の図書館、博物館、そして厚木市の公文書館などへも足を運びました。

歴史を知るためには、地域の歴史的事実を知ることが必須です。その重要な手段として数えられる、新聞報道は欠かせません。資料の検索は、幸いな事に「横浜貿易新報」（現在の神奈川新聞前身）の記事目録に行き当たりました。ページを繰りながら、金田地区に関する記事タイトルを落とすことなくメモし、地域の歴史の変遷を確認することができました。身近な問題、驚くような問題の数々にページを繰ることが楽しくなりました。

その中から今回は、「金目川電車」「金目川電鉄」「金目川砂利軌道」「金目川電気軌道」の文字を見出しました。私たちの住む金目川沿岸に電車を走らせる計画が持ち上がっていました。金目川に沿う交通機関は、馬車が走り、後にはバスが走行していました。加えて電車敷設の計画とは。　記事を追いかけました。

時は１９２６（大正１５）年。今から９４年前です。

大正１５年９月１０日　　平塚を中心にし　鉄道と電車新計画 神中鉄道は平塚駅を起点に大久保都市住宅を経て伊勢原町経由し大山町に至る線路を計画の一方伊勢原厚木町間を延長し横浜に通ずる計画のもとに９日から測量を開始したが尚ほ金目川の砂利採取を目的に平塚秦野間の旅客運輸する金目川電車が株式募集中である

神中（じんちゅう）鉄道が平塚を起点に大山までの路線と伊勢原から横浜に通ずる運輸計画が立案され、軌道敷設の許可を得ました。その後、神中鉄道は１９４３（昭和１８）年に相模鉄道に吸収合併されますが、大正時代の初年から、横浜と海老名を結ぶ路線の開発を進めていました。大山はご存知の通り観光地です。また、相模川のアユ、七沢などの温泉の景勝地、そして、沿線一帯の穀類、生糸、木材、薪炭、畜産物輸送（相鉄グループ１００年史）等、この地域と横浜を結ぶ路線の高い経済効果を見込んでいたと思われます。

関東大震災（大正関東地震）は、１９２３（大正１２）年、関東地方の太平洋岸に未曾有の大被害をもたらしました。その３年後の記事です。金目川の砂利は、関東地震からの復興資源として有望視され、砂利採取の運輸手段に加えて、旅客輸送を目的として金目川沿岸地域に電車を走行させる会社設立の株式が募集されていました。

需要拡大による砂利の採取は、最大消費地である東京から至近距離にある相模川、多摩川でも開発が進められ、輸送手段として、京王電鉄、玉川砂利鉄道（南武線）、相模鉄道などの諸線が敷設・運行されました。

大正１５年１１月３日　　金目川電鉄　設立認可内報

資本金百万円の金目川電気鉄道株式会社を設立し平塚秦野間八十哩の鉄道を敷設すべく兼ねて主務省に申請中であったが一日鉄道省監督局より設立許可の内報が県にあった因みに同会社の幹部は田中亀之助、小串清一、亀井藤蔵の諸氏である

鉄道省によって金目川電鉄の設立は大正１５年に許可されました。
中心になって進めていた会社の幹部の一人に田中亀之助氏があげられます。

田中氏は、先立つ明治３２年、神奈川県川崎町に「川崎電気鉄道」を開設させた発起人の一人です。電車は川崎駅と川崎大師間（お大師さん）を結ぶ約２㎞の路線です。当時の参詣客輸送には、人力車が多用されていましたが、客の増大に目をつけ、鉄道による大量輸送を目論みました。発起人は１３人、鉄道敷設には莫大な資金が必要です。大株主は東京と横浜の資産家、川崎からは、田中氏ただ一人でした。計画時は人力車業者の反対が強く、鉄道の発着点は川崎駅からではなく六郷橋の南詰の地点となりました。

会社は大師電気鉄道（後・京浜電鉄と名称変更）となり、田中氏は取締役、常務取締役を経て、明治４２年に退任しています。その前年には衆議院議員として、後に、参議院議員を歴任しています。

小串清一氏は、県議、戦後に衆・参両院の議員。亀井藤蔵氏は、県議（人名辞典）とありますから、県議としての人脈が、新設金目川電気鉄道（株）の幹部として就任していたようです。

昭和２年２月１８日　　金目川砂利軌道発起人会

平塚町を起点として目下計画されている資本金百万円の金目川砂利採取軌道はその後粛々事務の進展を告げているので昨十七日午後一時から平塚町朝日屋に発起人会を開き今後の方針につき種々協議する處あった

事業計画の進展し、金目川砂利採取軌道会社の発起人会を開催し、具体的な方向付けが協議されました。会場となった平塚町の「朝日屋」は、平塚駅北口ＭＮビル交番の辺りにあった店だと思います。現在は移転しています。

昭和２年２月２０日　　金目川電気軌道発起人会

金目川電気軌道株式会社の□□について一昨十七日平塚町朝日屋に発起人田中亀之助、亀井藤蔵、古川氏外数名会合の上電気軌道手続きの件及び会社設立につき種々協議する處あったが平塚、秦野間を本線とし土屋橋付近から秦野中学校を経て小田原急行電車の鶴巻駅で□□をとる支線を敷設し第一期工事は平塚金目村、青柳間で開通の節は地方産業の開拓其ノ他に非常な便利を来たすので軌道の人気は中々旺盛なものである

金目川電気軌道のルートは、平塚と秦野間を本線として敷設する。また、土屋橋付近から秦野中学校（現・秦野高校）を経て、小田急の鶴巻駅から小田原急行線に接続する支線ルートが決定されていたようです。

このルートの設定がもたらす経済効果は、産業振興と様々な便益が期待され、地元からの評価は絶大でした。

昭和２年６月１１日　　第一期線に着工する　金目川電気軌道　関係町村有志に諒解

平塚町を起点として大野村南原至る金目川電気軌道株式会社は愈々設立に着手し事務所を平塚町本宿権現横加藤方に置き大々的に株式募集に着手する事となり来る十二日金目村油屋旅館で大野、旭、金田、土沢、大根、金目の関係町村有志会を開き諒解を求める事となり既に創立委員長田中亀之氏（ママ）の名義で発送された工事は平塚海軍火薬廠引き込み線を分岐して第一期工事を大野村南原に至りさらに延長して金目村を経て大根村鶴巻温泉で小田原急行電車に連結をとる筈である

金目川電気軌道株式会社の事務所を設置し、株式の募集に取り掛かることになりました。会社運営の概要は、大野、旭、金田、土沢、大根、金目の関係町村有志会で了解を得ることになりました。

敷設される第一期工事は、平塚の海軍火薬廠の引き込み線から分岐して、南原までとし、金目村経由で鶴巻温泉から小田原急行電車に接続する予定とされています。

実現すれば、国鉄の平塚駅と小田原急行鉄道線による神奈川の県央地区を、そして横浜へと結ぶ壮大な鉄道輸送計画となります。

昭和２年７月４日　　好成績を挙げた金目川電車軌道　二十日に株式〆切り　八月末日に創立総会

平塚町を起点として秦野町に通ずる資本金百万円の金目川電車軌道株式会社では過般来株式募集の処成績良好で殊に沿線の金目村及び終点の秦野町は非常な勢いで地方と東京とで半数宛の持ち株が略纏まったので来る二十日に株式申し込みを締め切り八月三十一日に創立総会を開く事となった

金目川電車軌道株式会社の株式募集は、ほぼ予定通りに進み、２０日には、株式の申込を〆切、８月３１日には、会社の創立総会を開催する運びとなりました。

その後、金目川電車軌道株式会社関連の記事は見当たりませんでした。約１０か月後の昭和３年４月、「発起人告訴」記事が記載されています。

昭和３年４月２２日　　金目電車軌道の発起人告訴さる　保証金を返還せぬとて

金目電車軌道株式会社発起人川崎市榎町１３県会議員田中亀之助横浜市生麦３４９古屋鴻仁他９名は東京市京橋区柳町５弁護士市川三郎を代理人として静岡県駿東郡御殿場町西田中１９５山崎□男から二十日大蔵省に告訴された理由は金目電軌は資本金百万円で株式会社組織中のところ会社は山崎氏と電柱六百本と枕木二万八千本の売買契約を締結し保証金二千五百五十円を寄託したところ材料の引き受けを粛々請求せるも応ぜず図らずも契約を解除してきたので保証金の返還を要求せるも之に応ぜぬからである

金目電車軌道株式会社の発起人である田中氏他１０名は、御殿場の山崎氏から弁護士を立て、告訴されました。理由は、電鉄建築資材の電柱、枕木の売買契約を締結したけれども、材料の引き取はなく、その上、契約上の寄託金の返還もせず、最終的には契約を解除するという事態になり、告訴手続きがとられました。発起人による契約の不履行です。

以後、関連する記事を検索できませんでした。

金目電車軌道株式会社に係る事業は架空事業だったのか。告訴の結果はどのような審判が下されたのか。　いずれにしても、今日、平塚と鶴巻を結ぶ鉄道は敷設されていないのが事実です。敷設の計画は頓挫したことになります。

ほぼ同時代に、神中鉄道は平塚と大山の間を結ぶ鉄道の敷設も計画しています。伊勢原を経由し大山と結びます。　平塚を起点とする電車事業　（２）で紹介いたします。